

[論 文]

荷揚町小学校の歴史と主な特色ある教育活動 —創立の経緯から「総合的な学習の時間」の活動まで—

History of Niagemachi Elementary School and main unique educational activities
— From the process of establishment until activities of ‘the Period for Integrated Studies’ —

佐藤 淳介
Junsuke Sato

1 はじめに

「大分市立荷揚町小学校」は近隣の小・中学校3校と合わさり、平成29(2017)年に県内初の義務教育学校「碩田学園」となった。「碩田学園」としてまとまった小中学校は「大分市立碩田中学校」「大分市立荷揚町小学校」「大分市立中島小学校」「大分市立住吉小学校」である。なかでも「大分市立荷揚町小学校」の歴史が一番古く、沿革をさかのぼれば、大分県で最初にできた「大分小校」という学校にまでたどり着くことができる。「大分小校」は明治維新で廃校となっていた府内藩の藩校「遊焉(ゆうえん)館」に代わる学校の創設を地域の人々が願って創られたものであるから、そのルーツは江戸時代中期に創設された府内藩の「学問所」にまで遡ることができると言える。

さて、「大分小校」がどのように成立したのか、そしてその「大分小校」がどのように「大分市立荷揚町小学校」とつながっていたのかについては不明の点が多い。また、校名の変遷、校舎の変遷、教育制度・内容の変遷などについてもあいまいな点がある。本研究ではそれらの事実を明らかにすることが1つの目的である。

さらにこの小学校が市内の中心に位置し、時代を通して県内の模範校の役割を担っていたこと、さらに常に先進の教育研究校としての役割があったことを明らかにしたい。とくに平成期の「英語活動」「ことばコミュニケーション科」「総合的な学習の時間」「小中一貫教育」の研究活動と成果に注目することがもう1つの目的である。

研究方法としては『大分県教育百年史』、『大分市史』、各学校沿革史等をはじめとした基礎文献資料に合わせて「大分市立荷揚町小学校」に保存されていた校務「日誌」並びに大分県立公文書館・大分県立図書館等に保存されている史料を調査して行った。

2 明治初頭の政府の学校整備プラン

2-1 「府県施政順序」

幕末維新时期、様々な方面で近代化が急がれる中で、近代学校制度についてもその構築が急がれていた。中央政府は、西洋諸大国にあっては国のいたるところに初等学校が創られ中等学校や大学が整備されていることから、わが国にも早急に近代的な学校を整備する必

要を認識していた。しかしそれらをどうやって創るのか、何から始めるのか、予算はどうするのか等々問題は山積していた。

従前、わが国には諸藩に藩校があった。また各地に私塾や郷校なども多数開設されていた。江戸には「昌平坂学問所」もあった。さらに民衆一般の教育としては手習い所（寺子屋）があり、読み書き算のレベルも決して西洋諸国に引けを取るものではなかった。しかしこれらの教育機関をどうやって近代的な学校として作り変えるかについては、政府でも様々な議論があった。

明治2年2月5日政府は新しい近代国家を形成するために各府県がこれから何をすべきであるのか、どういう手順でそれを行うかについて「府県施政順序」を示した。この「府県施政順序」の中で新政府の重要施策の一つとして「小学校ヲ設ル事」が挙げられている。政府は従来の手習い所に代えて地方のすみずみまで小学校を創り、近代社会を生きるために必要な知識技術と道徳を行き渡らせようとしたのである。

2-2 「大学校」と「大学規則」・「中小学規則」

一方、政府は洋学者を中心に、大学の整備を早くから始めていた。明治元年、「昌平坂学問所」を「昌平学校」として復興し、さらに「医学所」・「開成所」を復興、これらを合わせて翌明治2年「大学校」が創られた。

この「大学校」は版籍奉還後の官制改革で一つの官庁とされ、最高学府であると同時に中央教育行政官庁でもあるという二重の機能を持つことになった。

さて、この大学で、明治3年2月「大学規則」・「中小学規則」が定められた。これは中央に大学を一つ設け、地方に中・小学校を置き、それらを中央の大学が統括するという一連の学校整備プランである。この内「中小学規則」では中学校・小学校を大学に接続する予備段階の課程と位置付けている。大学は外国人を中心とした教授陣が外国語で授業を行い、その入学準備課程として中学・小学教育が構想されたのである。

ちなみに、この明治初年の学校構想には、いち早く西欧化を行いたい洋学派と急激な西欧化に異議を唱えた漢学派や国学派の人々の対立があった。洋学派の人々は江戸時代末期から蘭学塾を開設していて、外国人によって原語で講義が行われる大学の創設を目指していた。

明治2年に設立した「大学校」は最高学府であり、かつ中央教育行政官庁となったが、当初から漢学・国学派からの反発が激しく、明治3年7月には結局閉鎖され、行政機関としての機能も停止された。その後明治4年7月18日廃藩置県の直後に大学は廃されて文部省が設立された。

2-3 小学校開設の始まり

明治元年12月には早くも静岡の徳川家兵学校(沼津兵学校)に付属小学校が設置された。小学校としてはわが国最初のものである。この小学校は兵学校の予備課程であり、入学年齢は7・8歳で、武士の子弟を対象としたものであった。教育内容は素読・手習い・算術で、その他に地理・体操(剣術・乗馬)・水練・講釈聴聞があった。この小学校を模範として明治3年には、藩ではいくつかの小学校を設立させている。

京都府では明治元年市内を町組(番組)に区分して番組ごとに小学校を設置するように

奨励した。明治2年5月に最初に「上京第二十七番組小学校」が開設され、12月までに全市64校の小学校が設立された。この小学校の教科は読み・書き・算術とし、別に二・七の日には漢書講釈、三・八の日には心学道話としていた。また、この小学校は成人にも開放されていて、小学校は町組の会所をも兼ねていた。

東京府では明治2年太政官から小学校を設置するよう指示が出され、翌明治3年6月、在来の寺院に6か所、小学校を設置した。それらの小学校は入学年齢8歳、学年は初級・中級・上級の3等級、教育内容は普通学と大学専門5科（教科（神教学・修身学）法科・理科・医科・理科・文科）の大意とした。この教育内容からみても、従来の手習い所のレベルよりもはるかに程度が高く設定されていることがわかる。つまりこの小学校の教育内容は明治3年2月制定の「中小学規則」に沿うものであることがわかる。

2-4 中津「市学校」

明治5年、福沢諭吉によって『学問のすすめ』が刊行されている。この『学問のすすめ』のはしがきに「此度、余輩の故郷中津に学校を開くに付、学問の趣意を記して、旧く交たる同郷の朋友へ示さんがため、一冊を綴りし」とあり、この本が福沢の郷里中津に学校を開設するために著されたものであることがわかる。

明治4年11月、旧藩主と藩士の共同出資によって「市学校」が開設された。旧藩主奥平昌邁（まさゆき）が「市学校」開設時に書いた「中津市学校之記」によれば「天与の心身を頼み躬（みづ）から身を投じ躬（みづ）から心を勞し芸学を勤め家業を営み一身不羈の志を立てその氣象を子孫に遺（のこ）さば子孫亦独立の一人たるべし」とあり、福沢の考えが大きく影響を与えていた。

初代校長は『学問のすすめ』の共著者小幡篤次郎で、教師は慶應義塾から派遣されていた。「市学校」は本科と別科に分かれ、本科では主として英語で、別科では主として訳書で授業が行われた。基本的な教育内容は前述した明治3年の「中小学規則」に近いものであって、大学の準備教育の学校であったといえる。開設当時は在校生600人といわれている。福沢の教育観を具現化してできたこの「市学校」は慶應義塾の分校のような位置関係にあったといえる。

3 大分県での学校設立

3-1 森下景端（かげなお）の学校構想

明治4年11月、大分県が設置され初代県参事（知事）として岡山県権大参事であった森下景端が任命され、大分には明治5年1月に着任した。¹県庁舎はまだなく、仮の県庁が大分郡南勢家町（現在の都町）旧本陣「酢屋」（幸松氏宅）に置かれた。同年3月県庁を「遊焉館」に移している。

この「遊焉館」とは旧府内藩の藩校である。府内藩には「学問所」として明和8

¹ 大分県の初代県参事（知事）には岡山県権大参事であった森下景端が任命されている。これは旧藩主大給近説が幕府方に近く、維新後に県参事に就任されることがなかったためである。

(1771)年二の丸に学校が創られている。天保11(1840)年に拡張され「采芹(さいきん)堂」と改称された。この「采芹堂」は、安政元(1854)年地震で倒壊してしまった。その後、天保4(1857)年、藩主大給近説(おぎゅうちかよし)が住んでいた北の丸の屋敷を改築して「文武場」を建て「遊焉館」と称した。当時の様子は「府内藩校遊焉館絵図」(弥栄神社蔵)で詳しく見ることができる。²その後、「遊焉館」は慶応元(1865)年に北の丸から中島(現在の荷揚町8、知事公舎付近)に新築移転している。後に県庁舎や学校として活用されるのはこちらの方である。明治4年7月の廃藩置県の頃には藩校「遊焉館」や他の藩校も皆廃止されている。

森下は明治5年4月19日の達書に「学校ノ議ハ政治ノ基本ニ候条、一日モ不可廢候得共、即今建校取調評議中」とあるように、早くから県内の学校整備を模索していたが、早速、明治5年6月4日学校設立に向けた趣意書である「さとの文」を布達している。³この「さとの文」は福沢諭吉の原案に大分県が手を入れたものとされていて、その趣旨は『学問のすすめ』に近い。その中で学校設立について触れている。翌日、続けて県は「建校告諭ノ文」を出し、県としての教育宣言を行っている。この「さとの文」や「建校告諭ノ文」が出された背景には学校設立を願う献金の申し出もあった。明治5年6月9日には旧藩主大給近説は学資金として2,000円を寄付している。また、「さとの文」の中に「有志の輩より寄附せし金の高別紙の如し、先づこの金を以て相応の学校を設け、尚年月を追ひ豊後全国に広く教育をおよぼすの場合にいたるべし」と触れられているように、この時、民間人の広瀬貞義等からも5,000円の学校設立のための寄付が寄せられていた。

一方この頃、福沢諭吉が明治5年5月に京都府下の学校を視察し「京都学校之記」を記していた。そして6月には、ちょうど福沢が郷里中津の「市学校」の視察をしている。

福沢が郷里に帰っていることを知った森下は福沢を府内に呼び大分の学校建設の指導を仰いだ。ここで「学校取建の仕組」と「大分県内小校課業表」が作られた。

「学校取建の仕組」によれば「小学校にては、原書并に訳書を教へ、数学、手習をも授く」「大分本県に一処の中学校を設け、外国の教師老名、日本の教師二名を雇入る」「元出張所之地九ヶ所并に府内市中に学校老ヶ所つつ取建、この小学校に原書の教師老名、数学、訳書、手習兼帯の教師二名つつを雇入る」などとあり、同じく「大分県内小校課業表」を見ても、中津の「市学校」にその学校構想が近似していることがわかる。

3-2 「大分小校」

明治5年9月1日、いよいよ学校の設立となった。学校校舎は旧藩校「遊焉館」を使用することとなった。開校を前に明治5年8月3日には「来ル七日より浄安寺え仮小校相開

² 大分市歴史資料館所蔵

³ 「大分県布告書」明治5年6月。日出町立図書館所蔵

候事」という「口達」が戸長から発せられた。⁴明治初頭に地方の教育行政を担っていたのは戸長であった。その「口達」は、浄安寺（大分市府内町3丁目3付近、のち移転）に小学校を仮設するというものである。そこにはまた「管内一般有志の者入校勝手」と記されており、入校制限は設けていなかった。入学金(入社金)・授業料(受教)・書籍借用料は、小学原書生(英文等原書)・小学訳書生(翻訳書)について、それぞれ定められていた。これらの内容を見ると、その学校組織は福沢諭吉の「学校取建の仕組」「大分県内小校課業表」に準拠したもので、福沢のプランをそのまま用いていたことがわかる。

この浄安寺に置かれた「仮小校」は、明治5年9月1日、3月まで県庁が置かれていた「遊焉館」に移転した。当時、この小学校は「大分小校」「府内学校」「大分洋学校」等と呼ばれていた。「小校」という名称は、長野の筑摩県でも用いられている。

中津の「市学校」が「慶應義塾」のいわば分校として教師を「慶應義塾」から招聘していたように、「大分小校」へは中津の「市学校」から教師が招かれた。この「大分小校」をモデルケースとして県内には豊後高田・杵築・日出・森・日田・犬飼・三重・竹田・鶴崎・臼杵・佐伯の11か所に分校が設置された。これらの分校にも「市学校」から教師が派遣されている。県内にあった旧藩の藩校は明治を境に、改組されたり機能を停止したりしていたため、それぞれの地方でも学校設立には積極的であり、寄付も集まった。

さて、「大分小校」に実際に入学してきたのは元の手習い所(寺子屋)教師や手習い所を卒業した者であったようで、卒業生の多くは県下の学校の教師となり、「大分小校」は教員養成所としての役割も兼ねていた。さらに「大分小校」は明治8年に県の学務課が設立されるまでは、県内の教育行政機関としての役割をも担っていた。

3-3 「学制」

明治5年8月文部省は「学制」を發布した。

「学制」はフランスの教育制度をもとに、全国を8つの大学区に分け、1つの大学区を32の中学区に分け、1つの中学区を210の小学区に分け、つまり、全国に大学を8校、中学校を256校、小学校を53760校建てるという壮大な計画であった。人口600人に1小学校、人口13万人に1中学校の割合とされた。

また、「学制」では、小学校は尋常小学・女児小学・村落小学・貧人小学・小学私塾・幼稚小学に区分されていた。

尋常小学は下等・上等にわかれ、下等小学は6歳から9歳までの4年間、上等小学は10歳から13歳までの4年間を原則とした。尋常小学の下等小学の教科は綴字・習字・単語・会話・読本・修身・書牘・文法・算術・養生法・地学大意・理学大意・体術・唱歌(当分マラク)の14科であった。

⁴ 明治5年8月に「仮小校」が浄安寺に設置され順次中津の「市学校」に準ずる学校として入学生を迎えることになるが、同時に県の行政機関の役割を兼ねていた。学校名称は「大分小校」「府内学校」等と称されていた。翌明治5年には「遊焉館」に移転。「学制」による小学校に変わるのは明治7年である

この「学制」の基本的な考え方は、先に示したように日本全国に均質な近代的学校を整備させようとする壮大な計画である。この「学制」の起草に当たっては多くの洋学者が中心となって行われている。したがってその教育観は洋学派の考え方が中心ではあったが、「学制」の起草には洋学者ばかりではなく長三州（名は茨（ひかる）三州は号、大分咸宜園出身）などの漢学者も参加していた。

4 大分における小学校の創生

4-1 「大分県小学仮教則」「大分県小学仮校則」「大分県小学舎則」

大分県においても「学制」に従って「学区」が編成され、明治6年3月には学区取締が設置された。人口600人につき1校の小学校設置が課せられた。

この頃、県下には大小さまざまな学校が設立され始めていた。「大分小校」やその分校のような福沢プランのような学校もあれば、江戸時代の手習い所と変わらない学校もあった。しかし、教師が一人で教えている小規模の学校がほとんどで、そこでは読み書き算を中心に教育がなされていた。明治6年9月には、「大分県小学仮教則」「大分県小学仮校則」「大分県小学舎則」がそれぞれ制定されている。

4-2 長三州文部大亟の学校視察

「学制」起草に直接かかわった主要なメンバーの一人であった長三州文部大亟は「学制」の普及状況を視察するために西日本を巡回した。明治7年1月、大分県下をも視察することとなった。

長三州は県内の学校を視察したが、それらの教育内容や方法がまったく「学制」の趣旨に沿っていないことを知り、森下景端に「学制」に基づく県内学校のカリキュラム改編を急ぐように勧告し、あわせて教員不足を指摘し、その養成機関としての「師範学校」の設立を強く指示した。

県内の多くの学校の教育水準はまだ「学制」の基準とは程遠いものであった。しかも、県が積極的に整備した「大分小校」の教育課程は福沢プランの洋学校そのものであったために、これを「学制」の尋常小学に改編する必要に迫られた。

また、「学制」に基づく学校の普及のために教員の養成が急務であった。そこで県は師範教育のため、明治7年5月8日「遊焉館」に「師範学校伝習所」を設置した。そしてすぐに第1回50名の受講生を募集している。当時「師範学校伝習所」の受講期間は60日間であった。同年7月には初の卒業生を出した。この旧遊焉館にあった「師範学校伝習所」はその後、明治9年2月火災で焼失して、同10月に府内城の南（現在の県庁南部分）に新設移転され校名も「大分県師範学校」と改称された。

4-3 「府内学校」「第1荷揚町女学校」「第2荷揚町女学校」

明治7年11月3日、県は「大分県各小学規則」「大分県各小学罰則」「大分県各小学教員心得」制定している。これは「大分小校」をはじめとする当時各地に創られていた小学校の諸制度を、「学制」に準拠したものに改めたものである。これによって大分県下の小学校は全国標準の教育課程に改編整備されることになった。

はじめに「大分小校」が改編された。「大分小校」は男子のみの学校であったため、男子校として「府内学校」が創設され、女子校として、翌明治8年「第1荷揚町女学校」が、さらに「第2荷揚町女学校」が創設された。⁵

大分県下では「大分小校」のように整備された学校のほかは、個人の住宅や寺院などを使用している小規模な学校がほとんどであった。これら多くの学校の整備も急務であった。そこで県は県内各地に学校用地を無料で下げ渡す旨の布達を出している。これに呼応して、明治7年の11月から12月にかけて、県内各地から一斉に学校用地の払い下げ願いが出されている。

「学制」に基づいた新制の「府内学校」「第1荷揚町女学校」「第2荷揚町女学校」の初代校長（主坐教員）には「師範学校伝習所」第1期の卒業生であった片野續が就任している。

この時、「府内学校」の校舎は遊焉館から旧府内藩の勘定所跡（府内町3丁目6、校門は北側）に移転している。

この新制小学校の創立した明治7年11月の入学生は163人で、翌明治8年1月にはまた入学生が19人入学している。さらに2月には8人の入学生を迎えたとする記録が残されている。当時、入学の時期は現在のように4月とは決まっておらず、明治20年代になっても入学が年に何回もあったようで、明治21年2月3日「大分学校」から郡役所に新入学の時期を年1度もしくは2度とするよう願いを出している。

明治8年3月13日町村区画分合改称によって「府内」は他の8町と合併され「大分町」（新町）となった。小学校は「大分小校」の頃からの呼び名である「府内学校」と呼ばれたり、この頃一時期「新町学校」とも呼ばれたりした。それ以降は「大分学校」と呼ばれている。

さて、入学生は次第に増えて、明治8年5月には全校で5学級となったが、教員は4名しかおらず、県に教員増員の願いが出されている。また明治8年12月25日には県に校地543坪の無料の払い下げを嘆願し許可されている。前年の明治7年11月に小学校の設立に限り500坪以内の土地を無償で下げ渡すという布達があり、それから県下一斉に小学校用地の払い下げ願が県に出されている。「大分学校」の543坪についてもこの措置によるもので、500坪をオーバーした43坪については町の中心地で人口も密集しているためなどと理由を付けて許可してもらっている。この払い下げられた土地に明治11年小学校の新校舎が完成した。後の「荷揚町小学校」の位置である。⁶

「第1荷揚女学校」の位置は現在の大手町3丁目1、県庁位置北側でその後「県立中学校」ができる場所である。校門は遊歩公園側に面していた。「第2荷揚女学校」の位置は現在の府内町3丁目9、校門は南側であった。⁷明治10年6月26日に「第1荷揚女学校」

⁵ 校務「日誌」には「女学校」と記されている。

⁶ これまで、校舎の「現在地 大分市荷揚町3番49号」（本論執筆の時点ではすでに取り壊されている）への移転は明治20年とされているが、明治20年は改築校舎が完成した年である。

⁷ 各学校の位置は「大分町図」大分市歴史資料館所蔵並びに初代県参事森下景端が描かせた大分市街図（岡山県所蔵）を参照した。

と「第2 荷揚女学校」は合併されて、校名を「大分女学校」と改称している。そして校舎を「大分学校」が新設校舎に移転したあとの旧勘定所に統合移転している。この頃、県内の学齢児童数は85,385人、内就学している者20,735人、不就学64,650人であった。

明治11年には「大分学校」の教員数は23人となっており、教員は「大分学校」「大分女学校」両校を兼任している。実際には2校は同じ学校であって、男女で校舎が別であったと考えるとわかりやすい。「大分女学校」には当時数少ない女性教員が1名いた。児童数は「大分学校」男485人、「大分女学校」女271人であった。明治11年当時の記録を見ると、小学校は県内に577校出来ていたが、そのほとんどは教師1人の学校であった。またそのほとんどは男女共学であって、「大分学校」「大分女学校」のように男女別に2校独立した形となっているのは特別であった。明治18年9月8日には元町に「分教場」を設置している。もちろんここも男女共学である。

「学制」によって定められた尋常小学校は先にも触れたように、「初等小学」4年（義務）「上等小学」4年であった。「初等小学」は8級から1級までが半年ごとに設定されていた。「上等小学」も同様に半年ごとに8級から1級までとなっていた。しかし実情はなかなか学校が創設されたばかりで、規定のように児童は就学していなかった。しかも最初の半年で半分以上の児童が辞め、上等小学まで進むものはかなり少なかった。明治11年の統計では県内の「下等小学」8級生は24611人であるが、7級8035人、6級4830人、5級3147人、4級1930人、3級1532人、2級926人、1級606人、「上等小学」8級210人、7級152人、6級51人、5級82人、4級30人、3級12人、2級16人、1級13人であった。また、この当時、学級は同年齢ではなく「下等小学」8級では3歳から19歳、「上等小学」8級では10歳から17歳などかなり年齢に差がある子どもが同じ学級で勉強していた。進級試験も厳格に行われていて、各級別々に進級・卒業試験が行われていた。もちろん進級できない落第者もいた。

5 小学校の変遷（明治期）

5-1 「教育令」発布

明治12年9月29日「教育令」が発布され、小学校は初等科（3年）中等科（3年）上等科（3年）となった。明治5年に出された「学制」は近代化を急ぐあまり、あまりにも強制的で社会の実情にそぐわなかったため、それを改めたものがこの「教育令」である。これは全体的に「学制」の制度を緩めたものであった。しかし、逆に制度を緩めた結果、全国で教育の整備が急に停滞し始め、学校建設を取りやめたり、就学を控えたりする例も多くみられるようになった。そのため、「教育令」は直ちに改正されることとなった。そして翌明治13年12月28日改正「教育令」が公布された。明治14年11月2日文部省の江木千之（後の文部大臣）が視察のため「大分学校」「大分女学校」に来校視察しているが、江木は「教育令」のこの改正に臨時事務取調掛として直接携わっていた人である。彼の地方視察は「教育令」改正後の教育調査であった。

明治16年「大分県師範学校」に附属小学校が開設されることになった。それまでは伝習所付設の小学校はあったが、本格的な附属小学校は持っていなかった。急遽、附属小学校の児童を確保する必要から、同年5月19日、「大分学校」に児童借り受けの願いが出さ

れ、これを許可している。「大分学校」から付属小学校に1年前期生17人、3年後期生30人が父兄の同意を得て送り出されている。

5-2 「小学校令」公布、校舎改築

明治19年4月9日「小学校令」が公布された。尋常小学校（4年義務）、高等小学校（4年）とされた。翌20年4月1日、「大分学校」は「大分尋常小学校」となった。それまでは小学校は初等科（3年）中等科（3年）上等科（3年）であったので、「大分尋常小学校」には下級の児童だけとなった。上級の児童は後述の「大分郡高等小学校」に移されることとなった。

さて、明治11年に新設された「大分学校」の新校舎は造りが悪く、傷みが激しくなっていた。明治17年12月22日教育集会において改築の議が起こり、その改築に向けて寄付が集められた。最終的に寄付は総額2,000円以上も集められた。校舎の改築は、しかし、なかなか進まなかった。何度か改築が世評に上っては消えた。というのもこの時期がちょうど「小学校令」の公布と重なっていたためである。「小学校令」が大幅な学校体系の変革を伴っていたために、改築校舎の図面変更等、予期しない事態が起き、そのため着工時期が遅れていたのである。

それでもいよいよ着工が決まり、明治20年2月21日、「大分学校」の校舎の使用が終了した。そこで、「大分学校」の授業は「大分女学校」で時間を繰り合わせて行うこととなった。2月25日には男子児童を移すために、男子用教具を「大分女学校」へ搬入している。

2月28日より男生徒の授業が「大分女学校」の校舎で開始された。女子は午前8時より12時まで、男子は午後1時より5時までと時間をずらして授業が行われ、校務日記には「教場の繰替等大混雑なり」というありさまだったと記されている。授業は校舎改築まで、とりあえず隔日に行うこととして、その代わり土日にも授業を行うこととした。

またこの時の制度改革によって4月16日校内に「大分簡易学校」が併置されている。同日付で約120人が簡易科に移った。「大分簡易学校」の場所は初め小学校内にあったが、6月21日荷揚町の中村氏宅を仮校舎として移転した。簡易科は困窮な家庭の児童のために開設されたものであり、授業料は無料で3年制であった。県内では経済状態のよくない家庭が多く、尋常小学校519校のうち90校が簡易科で代用されることになり、残りの129校のうち53校には簡易科が併設された。「大分尋常小学校」の簡易科は明治25年4月に廃されている。また、明治20年9月8日にはやはり制度改正で、裁縫科が設置されて仮開校式が行われ、10日より授業が始められた。

10月24日、ようやく新築校舎が完成し、開業式が執り行われた。女子児童も新校舎に移ったため、「大分女学校」のあった旧勘定所には10月26日に「大分郡高等小学校」が入り、ここで開校式を挙行している。

10月29日授業が開始された。「生徒の員数に比し体操場の狭隘なるは遺憾成惜むべし」と日記にあり、男女共学となり児童数が一気に増え、運動場がはじめから手狭に感じられていたことがうかがえる。また、明治21年4月20日の日記には「遊戯場男女混合せざる様充分な監督をなす事」とあり、男女共学に学校側が神経を使っていたことがうかがえる。

これより先、校舎改築中の明治20年2月24日に文部大臣森有礼が「大分女学校」に来校視察している。この時は川上視学官や知事らも同行している。授業参観後、大臣から「女子の教育は殊に注意すべき」との指示があった。改築後の翌明治21年11月5日には文部省から再び川上視学官等の視察があった。この時には視学官から「本校は本県首府の学校として全県下目標とするべく充分の模範を示さざる可らざる事を銘肝し各教員努力せよ」との諭達があった。

明治20年4月8日、男女児童を津留河原へ春季野遊として引率している。野遊というような遠足は、明治14年4月21日の日誌に「生徒男女共蓬莱（春日公園）迄遊歩」という記事があり、早くから行われていたことがわかる。

明治20年10月27日には全校で蓬莱山まで行き運動、体操・遊戯が行われていたという記事がある。参観人も多く盛況であったようで、校務日誌には「運動会必要の感覚を惹起せしむ」とあり、今後は運動会を行いたいという機運が広がっていった。翌明治21年4月10日には初めての春季運動会が蓬莱山で挙行された。優秀者には賞品が出された。この賞品は大筆や習字用紙などで、教員が持ち合って用意している。明治23年11月21日の秋季運動会（蓬莱山）のようすは校務日誌に詳しく書かれている。それによれば午前旗取り、球拾い、徒競走、隊列運動、午後に二人三脚、盲目旗取り徒競が行われ、「大分町学校設立以来未曾有の盛会」、「沿道町の父兄は隊伍の整然皆々感涙せり」と記されている。この時も教員より商品（白紙600枚、大筆250本、石筆250本、草紙61巻等）が提供されている。こうして運動会が学校の一大イベントとなっていくことが伺える。明治30年頃には男女別々に日を変えて運動会が行われている。校務日誌には男の運動会は参観人が「山の如し」であったと記されている。

明治23年10月30日「教育ニ関スル勅語」が發布された。翌24年2月14日勅語奉戴式が盛大に挙行された。勅語奉戴式は以後毎月初めに挙行されるようになった。

明治25年9月16日には幼稚園が設置された。保母は4人、園児は82人であった。幼稚園のために小学校の2教室が充てられることとなった。幼稚園はその後、明治31年9月14日に「大分女学校」があった勘定所跡に移転している。

明治37年10月24日、校長吉松貞三の時、改築工事の完成した明治20年10月24日を創立記念日に定めた。⁸

5-3 「大分郡高等小学校」創立

明治19年「小学校令」の公布によって、従前の小学校（初等科3年、中等科3年、上等科3年）が尋常小学校4年、高等小学校4年に改編された。「大分学校」をはじめ県郡内の小学校はすべて尋常小学校となった。そこで従前の小学校の中等科2年生以上の児童は高等小学校に通うことになった。しかし県内の小学校では実際には、すぐに高等小学校に入学する児童は少なく、しばらくは尋常小学校に温習科を設けて、そこである程度の実力をつけてから高等小学校に入学させている。

⁸ この時定められた創立記念日は廃校となった平成29年まで引き継がれた。

明治20年2月大分郡内に初めて大分町に大分県総町村組合立の「大分郡高等小学校」が設立された。明治20年6月16日には仮開校式が長池町善巧寺で行われた。翌日から編級試験が行われて、男児78人、女児65人が入学した。はじめ授業は長池町の善巧寺、胡町の浄龍寺、萬屋長の私宅を借用して行われていた。

明治20年7月「大分女学校」が使用していた勘定所跡に移転して、10月26日この場所で正式の開校式が行われた。

「大分尋常小学校」では、「大分学校」時代の上級生が明治20年度から高等小学校に進学する予定であったが、高等小学校の設立が遅れたためにしばらく高等小学校補習生として同居していた。ようやく進学できたのは6月16日になってからであった。

「大分郡高等小学校」はその後明治21年4月に鶴崎にも高等小学校ができたために、校名を「大分高等小学校」と改めている。

明治27年6月には生徒が年々増加して、また校舎（勘定所跡）が老朽化していたことから、校舎を新築移転することとした。明治28年8月4日に新築校舎を「大分尋常小学校」の東隣に新設して落成式を執り行った（校地965坪、建坪299坪）。校舎は平屋2棟で、その後明治31年8月に二階を増築している。この「大分高等小学校」の新校舎は、「大分尋常小学校」と同じ門を使用していた。8月4日の落成式には大分尋常小学校の全校児童が参加して祝っている。「大分高等小学校」はその後明治35年4月23日金池に新築移転した（後の金池小学校）。

明治37年6月28日「大分尋常小学校」内に、「大分町立大分商業補習学校」が付設されている。この補習学校は明治39年3月に廃校となった。

5-4 「小学校令」改正、「大分女子尋常高等小学校」

明治40年「小学校令」が改正され、翌明治41年から義務教育が6年間となった。これに合わせて各尋常小学校（4年）では高等科（2年）が加えられ尋常高等小学校（6年）と改編された。一方で、金池の「大分高等小学校」の方は、逆に尋常科が加えられ、こちらも尋常高等小学校となり、他の小学校と同じ編成の小学校になった。

ところで明治40年4月1日、大分町では西大分市・荏隈村・豊府村を合併している。これによって大分町にあった小学校の名称を次のように整理した。「大分第一尋常高等小学校」（大分高等小学校）、「大分女子尋常高等小学校」（大分尋常小学校）、「大分第二尋常高等小学校」（西大分尋常小学校）、「大分第三尋常高等小学校」（永興及び豊府尋常小学校）である。

この内「大分第一尋常高等小学校」は男子のみの学校、「大分女子尋常高等小学校」は女子のみの学校となった。「大分女子尋常高等小学校」では明治41年4月4日入学式を迎え、その児童数は、尋常科703人（女子）、高等科162人（女子）であった。入学児童は大分、上野及び三芳地区の女子児童であった。ただし、大正5年度までは三芳地区の尋常科生は元三芳小学校に置かれた分教場に通っていた。

また明治41年4月、「大分女子尋常高等小学校」では幼稚園を付設している。「大分幼稚園」は明治25年に「大分尋常小学校」に付設する公立幼稚園として開園している。教室は「大分尋常小学校」の2教室が使われていた。その後、明治31年には勘定所跡に移転。

明治41年には小学校令によって組織改正された「大分女子尋常高等小学校」の付設幼稚園とされている。園舎は大正8年に勘定所の建物を取り壊しその跡地に新築された。その後は昭和20年7月空襲により全焼し、同年11月小学校の教室を借りて再開した。昭和26年7月に新校舎が落成し、10月16日第60回開園記念日に落成式を行っている。昭和40年園舎は増築されている。平成4年には創立100周年記念式典が挙行されている。平成12年には園児の減少から廃園となった。

6 小学校の変遷（大正時代）

6-1 新校舎の建築

大正4年頃から校舎等の改修・建設の動きがみられるようになる。⁹

大正4年12月24日校地266坪が拡張された。大正6年7月1日校長住宅（北西隅）が落成。同12月7日新築校舎の建築工事が開始された。大正7年3月には北校舎の長さ14間部分（北校舎西側）と付属便所等が落成した。同年9月には北校舎の残りの部分と東側付属建物の改築が完成した。

大正9年3月には第2校舎（南校舎西）28間が落成。同年6月には第3校舎（南校舎東）長さ23間が落成している。続いて同年8月には講堂並びに小使室、湯沸場が落成した。

こうして大正9年10月24日には校舎落成式が挙行され、落成記念大運動会が行われた。

6-2 「大分市荷揚町尋常高等小学校」

大正時代半ばになると、大分市の人口の増加によって、市中心部の小学校新設が期待されるようになっていた。大正13年4月1日によりやく2つの小学校が新設された。「大分市大道尋常高等小学校」と「大分市中島尋常高等小学校」である。これによって学区域での大幅な小学校の組織編成がなされた。この時「大分女子尋常高等小学校」は「大分市荷揚町尋常高等小学校」と改称されて、男女共学となった。この年、尋常科5年以下に新たに男子児童が入学してきた。

7 小学校の変遷（昭和戦前）

7-1 この期の教育

昭和2年1月17日にはアメリカ人形歓迎会が市役所で行われている。歓迎会には6年生の代表が参加している。この国際親善の人形交換会は昭和11年までの記録がある。

昭和3年頃から、小学校にピアノを設置させたいと願う教師や保護者をはじめ地域の人々から4,000円以上もの寄付が集められた。この中の3,000円でスタインウェイ&サンズのピアノを購入することができた。このピアノのお披露目として11月26日にピアノ開き学芸会が開かれた。また残りの寄付金は様々な教具や教材の購入に充てられた。

昭和になると、また小学生のスポーツも盛んとなり、新聞社の主催による市内小学校野

⁹ 建築に関する簡易な図面は校務日誌と共に保管されている。

球リーグ戦も始められている。昭和4年には大分市小学校六校連合体育会が大分中学校で開催されている。昭和7年には中島小学校とのバスケット練習試合が開かれている。昭和9年にはラジオ体操の記録があり、女子の球技大会の記録も残されている。また、相撲も全国的なブームが起こって、昭和11年には県主催の学童競技角力大会が行われ2等に入賞している。この年に校庭に本格的な土俵も整備された。

一方、昭和3年19月9日には運動場東隅に奉安殿が落成している。ここには教育勅語の謄本と御真影がまつられた。この頃になると、戦争に向かって学校の中にも時局を反映した出来事が多くなっている。

昭和5年4月1日「大分市荷揚町尋常小学校」と改称して尋常科のみの小学校となった。高等科の男児は「大分市金池尋常高等小学校」に移され、高等科の女児は「大分市中島尋常高等小学校」に移された。中島小学校の高等科はこの時から女子のみになり、荷揚町小学校と金池小学校の高等科の女子を受け入れている。金池小学校の高等科は男児のみとなり、他校の男児を受け入れている。この頃になると児童数が増えて、また高等科に進学する児童も増えていた。各小学校では定員にゆとりがなくなり高等小学校の増設が期待され、昭和8年4月1日、駄ノ原（現、南春日町）に高等科単独の「大分高等小学校」が創立された。この「大分高等小学校」は昭和16年「大分国民学校」となり、戦後昭和22年「碩田中学校」になる。「碩田中学校」はまもなく昭和24年に中島十三條（碩田町）に移転し、そのあとの校舎を「王子中学校」が使用した。昭和8年当時、この場所には「大分高等小学校」「大分青年学校」「大分実践女学校」が建てられていた。この「大分高等小学校」は市内の小学校高等科の全児童を収容できたために、ほかの尋常高等小学校はすべて尋常小学校に改編されたのである。

昭和16年3月1日には「国民学校令」が公布され、同年4月1日に国民学校が発足した。校名は「大分市立荷揚町国民学校」となった。教科は国民科・理科・体錬科・芸能科・実業科の5教科となり、皇国民錬成が目ざされた。義務教育の期間も初等科6年・高等科2年、合わせて8年に延長される予定であったが、戦争激化のためその実現は見なかった。

7-2 皇室等の歓送迎

荷揚町小学校は町の中心にあり、古くから大分の県民・市民にとって代表的な学校であった。児童数も多く様々な公式行事に参加している。戦前のこの時期にも、大分を訪れる皇室をはじめとする賓客をもてなすため、児童はその人々の歓送迎に協力していた。校務記録に残る一番古いものは、明治21年1月の有栖川親王奉迎の記録である。2日前の12日、準備のため午後休業、14日当日は奉迎のため午後休業となった。児童による盛大な歓送迎式典のようすが記されている。

以降も明治32年には旧府内藩主大給子爵、また大正7年には閑院宮・北白川宮、9年には皇太子、10年には久爾宮、11年には閑院宮、13年には秩父宮、昭和5年には秩父宮、8年には高松宮妃、9年には伏見宮、梨本宮、10年には梨本宮、17年には東條首相を出迎えている。また、こうした皇族や首相の歓送迎のほか、軍人・軍隊・移民使節団等の歓送迎にも頻繁に参加している。

7-3 校舎の改修等

昭和に入っても間もなく昭和3年3月31日に講堂の修築工事が行われた。昭和10年8月から9月末にかけて、校舎の傾斜腐朽破損が強いため14,000円余を投じて耐風耐震補強工事が行われている。昭和11年7月16日には相撲土俵の起工式が行われている。昭和11年8月4日講堂が修繕され、またそれと同時に、学芸会や儀式などの場合の通路用の北入口が講堂西側に新たに作られている。昭和13年2月5日には、理科教材園が中島四条の土地4畝歩を借りて設置された。昭和15年6月18日保護会より紀元二千六百年記念事業として5,000円が寄贈され、講堂西側に運動場(353.5坪)が拡張された。昭和15年9月25日には二宮尊徳像が建立されている。この像の前に集まり、毎月20日「金次郎の日」が行われた。しかしこの像は昭和17年12月3日に撤去されている。昭和20年3月19日本土に本格的な空襲が始まった。昭和20年7月17日の大分空襲では講堂、東校舎、東便所に焼夷弾を受けたが初期消火された。同日、「大分幼稚園」が全焼した。幼稚園の事務所が「荷揚町国民学校」に移された。

8 小学校の教育活動(昭和戦後)

8-1 「大分市立荷揚町小学校」

昭和22年4月1日「学校教育法」が施行され、「大分市立荷揚町国民学校」は「大分市立荷揚町小学校」と改称された。7月5日には中島小学校の校舎が落成して、一時「荷揚町小学校」に合併されていた中島校区の4年生以下の児童が新校舎へ移転していった。

昭和23年3月25日南西校舎が火災にあい、校舎120坪、土間20坪、便所10坪、8教室が全焼した。

昭和28年12月16日校舎の改築が決定した。翌昭和29年6月7日には改築工事のため、給食が停止となり、講堂には間仕切りが行われ教室として代用されることになった。6月13日には校舎の取り壊しが開始され、8月9日には地鎮祭が行われ建築工事が開始された。昭和30年7月5日新校舎の落成式が行われ、6日に新校舎の感謝祭が挙行された。9月3日には南校舎の取り壊しが開始され、9月末に完了している。そして10月23日には開校80周年・校舎落成記念式が執り行われた。

8-2 学校給食

昭和15年4月、文部省から「学校給食奨励規程」が出された。学校給食は一部の地域を除いて主として貧困児童対象に支給されていたが、この規定によって、その対象を貧困児童のほかにも栄養不良児、身体虚弱児にも広げられるようになっていった。昭和15年、戦争は激しさを増して、小学校の教育も戦時色が濃くなっていった。同年12月15日からは、第一線で戦う戦士を思い、毎週水曜日を弁当のおかずを自粛する日と決められた。翌昭和16年には国民学校令が公布され校名は「大分市立荷揚町国民学校」と改称されている。

昭和17年には、いよいよ戦争が激しくなり、市民の食生活も厳しくなっていった。この年の6月22日から「荷揚町国民学校」においても希望者に乾パンが配布され始めた。対象児童はおよそ20人であったが、その後7-80人に配給された。一食の経費は8銭から10銭

程度であった。

昭和18年には軍へ供出用のニワトリやウサギが飼われ、幼稚園の敷地500坪にはソバが植えられた。昭和19年4月からは3年生以下の児童に毎日乾パンが支給されることとなった。小学校では勤労奉仕も増えて、芋植え、稲刈り、麦踏みなどを行っていた。乾パンの給食は昭和19年まで続けられている。

昭和20年、焼けてしまった中島国民学校の児童と一緒に9月授業が再開された。といっても児童の人数は疎開などで半数に減っていた。昭和21年になるとようやく児童も戻り、9月には27学級にもなっていた。10月には戦後初の運動会が開催されるまでになった。

昭和22年1月27日には本格的な学校給食が開始された。ただし主食は持参で副食が給食であった。毎年1月下旬「学校給食週間」が開かれて給食に全校で感謝する気持ちを育んでいる。2月には炊事室が修理され、大かまど2個が増設され、壁も塗り替えられた。3月には炊事室に1坪余りの貯蔵倉庫が建設されている。

昭和24年2月21日農林省食品局長は各都道府県知事に対して子どもたちの給食にも肉類を特別に供給するように指示している。大分県ではその前年昭和23年に駐留軍からの放出された肉・肉製品を給食用に支給している。この時荷揚町校は1019人の児童がいたが、牛肉30ポンド(13.6Kg)が支給されている。ちなみに中島校(963人)には豚肉28.5ポンドが支給された。

昭和24年12月7日には県下で唯一「ユニセフ給食」の該当校に指定されている。「ユニセフ給食」とは国際連合児童基金(ユニセフ)によって、脱脂粉乳の支給を受け、それに日本側の予算でみそ・醤油・砂糖などの特配物資を加え実施されたものである。翌昭和25年2月12日には給食調理場の改装工事が完成した。調理場は23坪、倉庫は5坪であった。昭和27年には完全給食が実施されている。昭和32年1月28日学校給食文部大臣賞を受賞した。これを記念して、知事を招いて食事会が開かれた。この様子は4月1日の「給食大分」第1号のトップに掲載されている。

8-3 天皇の巡幸、皇室の奉迎

戦前同様、賓客の歓送迎の行事には何回も協力していた。戦後まもなく、昭和24年6月には天皇陛下の奉迎に参加している。いわゆる「人間天皇」としての九州巡幸は5月18日から6月11日にわたって、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県、宮崎県、大分県の順で行われた。この年の1月1日から日の丸掲揚の禁が解かれている。大分市では各学校・団体に奉迎場所を決めた。荷揚町小学校は協和銀行前電車通り角より北と決まり、当日は雨の中御料車を奉迎した。

昭和33年4月には天皇・皇后両陛下が第9回全国植樹祭のために大分を訪れた際、「荷揚町小学校」を訪問されている。天皇・皇后両陛下は4月7日鶴崎駅に到着後、住友化学の鶴崎工場を訪問され、そのあと荷揚町小学校を視察された。

「荷揚町小学校」には7日午後3時53分に到着され、職員児童をはじめPTA役員、県教育委員、市教育委員、市議会議員、市内小中中学校長、同PTA会長、市内各小中学校児童生徒代表の総勢1400人で出迎えた。学校では全国表彰された図書館や文部大臣賞を受賞した給食室を視察し4時8分出発され、ご泊所の白雲山荘に向かわれた。一行は翌8日国立

別府保養所、志高で植樹祭、温泉利用農業研究所、別府整肢園、9日高崎山自然動物園を視察、大分駅を出発された。

また、昭和41年10月には国民体育大会で大分に巡幸された天皇・皇后両陛下を、さらに11月には皇太子・同妃殿下を奉迎している。

8-4 鼓笛隊・ブラスバンド

昭和35年9月12日に鼓笛隊が編成された。この鼓笛隊はその後も市内の様々な催しに参加して好評を得ている。主な参加催しには次のようなものがあげられる。交通安全運動パレード、県新庁舎落成式、国体祝賀パレード、ドイツ連邦共和国リュプケ大統領訪問歓迎、新産都指定記念講演会、市合併一周年記念、「花いっぱい、緑いっぱい」運動、赤い羽根受領式、県内一周駅伝、中国武漢市使節団出迎え、大分市生活文化展、中央通りキャブシステム完成祝賀、ワールドカップ大分大会。

昭和53年にはまた「トランペット隊」が編成され、学内外の演奏会はもちろんのこと、鼓笛隊同様に日本童話祭や交通安全フェスティバルパレード、大分市生活文化展市内、海の記念日行事などの様々な催しに参加・協力している。昭和55年11月8日には第1回大分マーチングフェスティバルに出演した。「トランペット隊」はその後「金笛バンド」「金管バンド」などと呼ばれ活躍した。

8-5 沖縄開南小学校との交流

昭和36年PTA会長であった大分商工会議所会頭の草本利恒氏が経済視察団として沖縄を訪問した際に、荷揚町小学校の児童の作品を沖縄県那覇市の開南小学校へ持参したのを契機に、荷揚町小学校と開南小学校との交流が始まった。那覇市の開南小学校は那覇市の中心にある小学校で沖縄県庁に隣接していて、その立地環境は荷揚町小学校とよく似ている。ともに県市を代表する小学校である。この年、双方の小学校から図画、作文、習字、人形等などが贈られ親交を深めていた。昭和37年3月12日には沖縄の国内研修代表団が荷揚町小学校を親善訪問し、学校を参観している。

昭和38年3月28日から4月1日にかけて、開南小学校の2人の教師と男女合わせて10人の児童が紅型や琉球人形、絵はがき、校内活動の状況の作文などを持参し荷揚町小学校を訪れた。荷揚町小学校の児童は器楽合奏や踊りを披露し、開南小学校の児童も琉球舞踊で応えた。この時の渡航費・滞在費はすべて商工会議所の草本氏が負担している。これを機会に両小学校は姉妹校となった。一行は高崎山、大分合同新聞社、県庁、トキハなどを見学し草本会頭宅など4件に分宿した。昭和39年7月25日から31日まで、今度は荷揚町小学校の児童たちが開南小学校を訪問している。¹⁰

8-6 雉谷小学校との交流

上津江村立雉谷小学校との交流会が昭和58年から始まっている。そのきっかけとなった

¹⁰ 具体的な交流については「琉球新報」「沖縄タイムス」「大分合同新聞」に詳しい。

のは、昭和57年11月17日に雫谷小学校から「友情の干柿」が贈られてきたことである。翌昭和58年7月1日には6年生が雫谷小学校でキャンプを行っている。雫谷小学校との交流はその後も毎年行われ、秋に雫谷小学校の児童を招いて交換会が荷揚町小学校で開催され、雫谷小学校の児童たちは交換会の後には大分市内の見学を行っている。雫谷小学校の児童にとっても楽しい年中行事だった。一方、荷揚町小学校からも雫谷小学校への訪問やキャンプが時々行われている。平成5年11月7日荷揚町小学校開校120周年記念行事の際、雫谷小学校との最後の交流会が行われた。雫谷小学校はこの年を以て廃校となった。

9 小学校の教育活動（「総合的な学習の時間」）

9-1 「英語活動」

荷揚町小学校の教育活動の中でも英語教育は特筆すべきものがある。平成3年12月に臨時行政改革推進審議会（第3次行革審）の「豊かな暮らし部会」が小学校への英語教育導入の検討を提言した。これを受けて平成4年には大阪市立の2つの小学校が研究開発学校に指定された。それから毎年研究開発学校が指定され、平成5年には2校、6年には12校、7年には1校が指定され、8年には各都道府県1校が指定された。平成8年の第15期中央教育審議会答申では「小学校における外国語教育については、教科として一律に実施する方法は採らないが、国際理解教育の一環として、「総合的な学習の時間」を活用したり、特別活動などの時間において、学校や地域の実態等に応じて、子供たちに外国語、例えば英会話等に触れる機会や、外国の生活・文化などに慣れ親しむ機会を持たせることができるようにすることが適当である」としており、具体的には「子供たちに外国語や外国の生活・文化などに慣れ親しむ活動を行うに当たっては、ネイティブ・スピーカーや地域における海外生活経験者などの活用を図ることが望まれる」と指摘している。

平成8年荷揚町小学校は文部省「小学校及び中学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発」の研究開発学校となり「国際社会に生きる、豊かな表現力をもった子どもの育成-楽しく学べる英語学習をとおして-」というテーマでの研究活動が実施された。

荷揚町小学校においても先行事例研究が進められ、「英語学習運営指導委員会」を立ち上げ大学教授を招聘して研修が行われた。ALTとの授業での連携などの学習指導研究や教材研究、環境づくりなどの具体的な研究活動が始まった。翌9年度には教科の3%を英語学習に充てるようにし、また国際理解教育を推進するため地域の外国の人々との交流活動や行事の取り組みを積極的に行っていた。この頃から英語活動を平成12年から開始される総合的な学習の時間に発展させようとする具体的な方法の研究が進められた。こうした活動が定着してくると県内外から多くの視察団が授業の視察に来るようになった。平成10年11月8日にはTOSテレビの「ホットハート大分」に取り上げられて、英語活動が放映された。平成11年には再び文部省の研究開発学校に指定されている。

平成12年、いよいよ総合的な学習の時間がスタートした。新しくできた総合的な学習の時間では、英語学習に加え、より主体的な活動を行う場として国際理解教育の中核を担う「荷揚っ子ワールド」を実施した。また、1・2年生に対しては生活科の時間を週1時間削減して英語学習を実施している。荷揚町小学校には早くからALTによる英語学習開始されていたが、この頃にはALTによる英語学習が年間を通しての公開授業となっている。平

成13年度には英語活動の視察が総計で130人を超え、平成14年度に至っても視察者は90人以上あった。¹¹平成17年度からは英語活動ワークショップがアートプラザや金池会館などで開催されている。

9-2 「ことばコミュニケーション科」

平成20年度からは3年間文部科学省研究開発学校に指定され、「ことばコミュニケーション科」という教科を新設している。この教科は1年生から6年生まで各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動と並んで設けられた。この教科の目標は「主として英語を用いた活動を通して、児童の生活や教科等の学習体験を生かした伝え合いの楽しさを味わわせるとともに、よりよく人と関わろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養う」というもので、従来の英語活動をより発展させた取り組みで、国語はもちろんのこと道徳や特別活動とも関連させたユニークな授業である。

荷揚町小学校では総合的な学習の時間を「荷揚っ子ワールド」と称して3年生以上で実施している。この中に「ことばコミュニケーション科」が含まれている。1・2年生は総合的な学習の時間がないので、「ことばコミュニケーション科」のみ生活科の時間を削減して行われた。

「ことばコミュニケーション科」は全学年週1時間行われ、英語に触れ、自他国の文化理解や文化交流を通し豊かな国際感覚を育てることを目標に学習活動が進められた。題材は、子どもの生活や学習と密接に関連したことがらから設定され、音声主体の体験活動を展開させている。ただし4年生以上は、10時間程度、文字によるコミュニケーション活動の時間として「読むこと」や「書くこと」の指導に充てている。この「ことばコミュニケーション科」で学んだことを実際の交流活動体験で生かすことが「荷揚っ子ワールド」の主な活動になっている。

荷揚町小学校は英語活動と並んで国際交流も早くから盛んに行われている。昭和54年には武漢市からの使節団の出迎えや、中国武漢曲技団中の小学生との交換会なども行われた。その後も使節団の出迎えを行っている。昭和63年に開催された車椅子マラソン大会からは選手たちと交流会を持ち、選手たちから取材を行い、実際の大会では選手たちの応援を行っている。この車椅子マラソン大会での取材活動や応援は、その後も毎年のように続いている。

国際支援募金活動でも、平成13年にはインド地震災害救済街頭募金、タイ国難民支援活動、平成14年タイ支援活動、平成15年タイ支援活動、平成16年タイ・ミャンマー支援活動などが行われ、平成25年にもフィリピン支援募金活動が行われている。またAPUをはじめとする留学生との交歓会も行われている。

¹¹ 平成12年前後にかけて、「総合的な学習の時間」の先行実施校として全国から多くの授業参観が訪れている。

9-3 小中一貫教育

平成15年「構造改革特別区域」が設定され、平成18年11月には大分市が「大分市小・中一貫教育特区」に指定されている。

平成21年度から碩田中学校区が「小中一貫教育実践研究校」としての取組を始めている。平成22年度には小中一貫教育の「研究推進校」に選定され、平成23年度からはその「モデル校」に指定されている。ここでの取り組みは「学校、地域の特色を生かした教育課程」「小中学校間での乗り入れ授業」「公開講座」などであり、年3回の「大分市小中一貫教育推進協議会」の開催がなされている。これを受けて荷揚町小学校においては、とくに国語科を中心に「自分の思いや考えを伝え合う児童生徒の育成」の研究を進めている。また、碩田中学校へ出向いての体験活動や、中学生を招く活動などが行われてきた。

10 おわりに

荷揚町小学校の歴史をたどると、福沢諭吉の学校構想のもとに創られた「大分小校」にまでたどり着く。もともとこの「大分小校」は廃校になっていた藩の学校を再建したいという県民の願いで創られたものであるから、そのルーツは江戸時代の藩校にまで遡るとも言える。この「大分小校」は文部省の「学制」によって全国標準の小学校に改編される。そこで「府内学校」（男子校）と「荷揚町女学校」ができた。¹²それらの学校はそれぞれ「大分学校」と「大分女学校」になる。明治11年には「荷揚町小学校」の位置に「大分学校」の新校舎ができています。明治20年には2校が合体して「大分尋常小学校」となる。その年の10月24日には校舎の改築が完了して開校式が行われた。明治37年吉松貞三校長の時、その日を創立記念日と定めている。それから大正、昭和と時代と共に学校は発展し続けた。図書館は全国表彰され、給食も文部大臣賞を受賞している。鼓笛隊やブラスバンドの活躍もあった。平成になってからも「総合的な学習の時間」に代表されるように、県内で先進の教育を行ってきた。本論の作成にあたっては多くの著作・先行研究を参照させていただいた。小学校の主な出来事については主に校務日誌類を参照している。日誌類は欠損している年度もあり、年度によって記載内容や分量が異なっている。¹³このため史実記載が完全でないことをお断りしておく。最後に作成にあたって協力いただいた碩田学園、大分県立図書館、大分県公文書館、大分市歴史資料館、日出町立図書館、沖縄県立図書館、大分市教育委員会に感謝する。¹⁴

¹² 「女学校」の存在については以前から指摘されていたことがあったが、「大分尋常小学校」設立までの「女学校」の位置づけ（あるいは女子児童の教育）に関しての研究は管見では未開拓である。

¹³ 校務「日誌」は明治13年から廃校までの間、状態もよく保存されている。欠損している年度があるが130年以上にわたる校務日誌が残されていることは貴重である。

¹⁴ 本論は平成29年度「大分市「旧荷揚町小学校校舎記録図書」の作成支援業務」として行われた調査に基づくものである。

